

進歩とは…

合掌

先日は、埼玉第一教区新春法会に多数参加いただきありがとうございました。少年部の保護者の方には、豚汁づくりから、お餅作りまで、寒い中での作業、本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、今年は無年ということで、穏やかな1年であればと思っていたのですが、新年早々、悲惨なことが起きてしまいました。「イスラム国」による、日本人殺害です。あのような映像を見せられたご遺族のお気持ちを考えると、言葉がありません。ご冥福をお祈り申し上げる次第です。

人間の歴史は、戦争と殺戮の繰り返しです。どれほど多くの命が、その中で失われてきたでしょうか。開祖は、悲惨な戦争の経験から、二度と戦争を繰り返してはいけない。物心ともに豊かで平和な社会を作るために、自信と勇気と行動力、そして慈悲心を持ち、半ばは自己の幸せを半ばは人の幸せを考えて行動できる人を、一人でも多く育てることが大切だという思いから少林寺拳法を創始されました。幸いにして日本は、国としては、戦争や紛争という状態になることなく、経済復興を実現し、「平和で豊かな社会」を実現することができました。しかし、世界は、あの大戦後も、多くの戦争や紛争、テロと言った、人の手による殺戮が未だに繰り返されています。悲しい現実です。

戦争や紛争が起こる度に考えることがあります。人類の「進歩」ということです。吉田満氏の「戦艦大和の最後」に、太平洋戦争末期、沖縄に水上特攻に向かう大和の船内で起きた次のようなエピソードとともに、吉田氏の言葉が書かれています。

愚かな命令によって、愛するものと永遠に別れなければならない苦悩と憤り。「無駄死には嫌だ。自分たちの死に意味が欲しい。」自分たちの死の意義をめぐる青年たちの激論は、殴り合いの喧嘩となった。それを収拾したのは、哨戒長の白淵大尉の言葉だった。

「進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚めることが最上の道だ。日本は進歩ということを軽んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義にこだわって、真の進歩を忘れていた。敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか。俺達はその先駆けとなるのだ。」

生き残った同胞が、特に銃後の女性や子供がこれからの困難な時代を戦い抜いて、今度こそは本当の生き方を見出してほしいと、訴えるというよりも祈りたいような、声の限り叫びたいような気持ちだった。（中略）戦争のまっただ中でもがきながら、われわれの死をのりこえて平和の目がやってくることを、願わずにはいられなかったのだ。

進歩とはどういうことでしょうか。私は、「人としての慈しみの心を持つ」ということだと思います。慈悲心です。人を労（いた）わる心、思いやる心です。戦争、殺人、犯罪、それらは全て、自分の主張を、自分勝手に通そうとすることに発しています。相手の気持ちや立場、生命についての思いやりが持てないから、傷つけてしまったり、命を奪ったりするのです。暴力によって自己を正当化しているにすぎません。どんな時でも、自分だけの立場はや言い分だけを正当化し押し通そうとするのは、我儘な在り方でしかないのです。意見や立場が対立したとき、自分の保身ばかりに目を向けるのではなく、相手の立場や状態にもしっかりと目を向け、理解し合うこと。そして、互いを尊重し合い、折り合いをつけながら、共存の道を探っていくことが大切なのであり、そういう思考や行動を支えるのが「慈悲心」だと思います。そして、そういう心を持つことが、「進歩」であり、「本当の生き方」なのではないでしょうか。開祖の目指した理想郷とは、まさにそういうことだと思います。「自己確立」とは、そうした慈悲心と行動力を身につけることであり、互いを理解し合い、援け合って生きていくのが「自他共楽」の在り方なのです。そして、私たちは、真の「進歩」を続け、「本当の生き方」をするために、日々修練しているのです。

結手